



研修の一環で横浜を訪れ、巡視船を視察した研修員と伊藤さん

研修で生まれる人の輪で 海賊対策を強化したい

世界の海で繰り返される海賊行為。JICAは海上保安庁と共に、海上犯罪の取り締まり能力を強化するための研修を実施。JICA九州の伊藤友美さんは、各国の海上保安官のニーズに合った研修づくりに取り組んでいる。

タイで目の当たりにした 国際協力の課題

大学で専攻していた開発経済学の理解を深めようと、1年生の冬休みにタイでの研修プログラムに参加しました。約1カ月間、チェンマイ大学で講義を受けたり、農村を視察したり。私が訪問した農村では、ガラス細工を作って売ることで生計向上を目指していましたが、残念ながら質が低く、成果は上がっていないようでした。より効果的な支援のためにできることはないか。貧困の原因は一つではない。さまざまな角度から支援を行う必要があると考え、それが実現できるJICAで働きたいと思ったのです。

アフリカ各国の 研修員とつながった輪

最初に配属されたのは人間開発部。特に思い入れが強いのが、アフリカ15カ国を対象に5S※を推進する「きれいな病院プログラム」です。アフリカの病院では医療機器や患者のカルテが整理整頓とんざされていなかったため、治療や診察に不便が生じていました。そこでJICAはアフリカ各国の医療関係者を対象にした研修を行い、日本で5S

を取り入れている病院や、すでに5Sが定着しているスリランカで実践例を学んでもらいました。

しかし、どれだけその場で5Sを伝えたとしても、彼らが所属する病院のスタッフに参加してくれなければ根付きません。そこで、研修後のフォローアップとして、私が各国を回って5Sの意義を広めることに。病院全体で取り組んでもらえるよう、JICAがサポートしました。

日本の技術を学ぶことで人と人の輪が広がり、世界中に日本のサポーターが増えていく。世界と日本をつなぐ研修の魅力を実感しました。

海上保安庁との連携が支える 海賊取り締まり研修

現在はJICA九州で、20コースほどの国内研修の運営を担当しています。その一つが、「アジア・ソマリア周辺海域海上犯罪取り締まり研修」。アジア諸国と海を接する九州の知見を生かし、10年以上続いています。当初は東南アジア諸国を対象にしましたが、近年ソマリア沖で海賊被害が増加していることから、2006年以降は中東やアフリカからも研修員が参加しています。海賊対策を担当するのは、海軍や海上保



JICA九州
研修業務課
伊藤 友美
ITO Tomomi

大学卒業後、2009年にJICAに就職。人間開発部を経て、2011年5月から現職。

安組織、地方自治体の沿岸警備隊など、国によってさまざま。研修員の知識や技能、学びたいことにも差がありました。そのため、海上保安組織の強化から、海賊船の立ち入り検査の手順まで、できるだけすべての研修員の要望に応えられるよう、毎年カリキュラムを工夫しています。

また、この研修は日本の海上保安庁との連携なしでは成り立ちません。日々の業務で多忙な皆さんですが、途上国に貢献したいという思いは一つ。密に連絡を取り合い、カリキュラムの作成や講師の依頼などを進めています。

帰国した研修員が日本で学んだ技術を組織に広めていると報告をくれた時、とてもやりがいを感じます。研修で伝えたことが、各国で根付き、将来的には大きな力となってほしい。今後とも人の輪を広げることで、効果的な海賊対策に貢献したいと思っています。



人間開発部時代、5Sの導入を進めるため、タンザニアの病院を回った伊藤さん(右端)